



# 早苗地藏伝説の由来

**はじめに**  
 神奈川県横浜市都筑区のお折本町には、早苗地藏とよばれる二体のお地藏様が祀られています。一つは三尺八寸（約115cm）の立像で、もう一つはそれより五寸（約15cm）ほど低く、舟形光背を背負っています。こ



早苗地藏 コロナ禍でマスクをかけている

れらは人々のために身を挺して水路を掘った了信と娘のつがの慰霊のために建てられ、その伝説は近世以前から実話として語り継がれてきたといわれています。しかし、私はある人物によって大正時代に創作されたものだと考えており、その理由をこれから述べたいと思います。

## 早苗地藏の伝説

さて、父娘が掘ったという水路は実在し、「堂ヶ坂の切り通し」と呼ばれています。この水路は昭和9年（1934）に暗渠となっており、現在はその上を車道が走っていますが、近くに真照寺という古刹があり、父娘の伝説をまとめた『生命の泉』という本を頒布しています。まずは、この本から早苗地藏の伝説をご紹介します。

今から480年ほど前。鶴見川左岸の川和から折本にかけての平野では、低い位置にある鶴見川を利用す

ることができず、北側を東西に延びる丘から滲み出す水で灌漑していた。しかし、干天が続くと水はすぐに涸れてしまった。一方で丘のむこうの村々は、近くを流れる大熊川のおかげで、そのような心配はなかった。「丘を切り通し、大熊川の水を引くことができれば、人々はどんなに助かるだろうか。」丘の麓に庵をかまえ、娘のつがと二人で住む信という僧は、たった一人で鎌を取った。村人は気がふれたのだとバカにしたが、村役人の萬次郎と一緒に働くようになる。一人、また一人と作業に加わるようになった。

工事もだいぶ進んだころ、現場で事故がおこり、了信や萬次郎を含む4人の尊い命が失われた。父の遺志を継いだつがは、村人たちと作業に没頭した。しかし、さらに事故は起き、合わせて12人の犠牲を払いながらも、天文8年（1539）に大熊川からの水は切り通しを流れ、広い平野を

潤すようになった。

つがは15歳の若さで剃髪し、庵を切り通しの近くに移動して、亡き人々のために念仏を唱えた。村人は来る夏も来る夏も早苗を供え、それは山のようになり早苗塚とよばれた。

それから間もなく真照寺が建てられ、篤学の誉れ高い顕龍和尚が迎えられた。実は、顕龍和尚は武士であった了信を出家へと導いた人物であり、その後つがも真照寺に入寺した。

それから100年がたち、早苗塚の上に了信とつがのために二体の地藏が建てられ、早苗地藏と呼ばれるようになった。

## 『生命の泉』

この『生命の泉』は、真照寺の住職だった雲井麟静氏らが、大正11年（1922）に発行したもので、内容は前述した早苗地藏伝説の紹介と、地域の寺社などの概説から成り立っています。伝説は登場人物が細かく設

定され、芝居の台本のようなセリフ回しで書かれており、たとえ実話がもともとも、かなり脚色されていることは明白でした。

## 伝説の原形は？

それでは『生命の泉』以前に、原形となった話が存在したのか。例えば文政13年（1830）に完成した『新編武蔵風土記稿』を見ると、折本村や堂ヶ坂、真照寺など、伝説に登場する地名などの項はありますが、早苗地藏の伝説にはふれていません。この地誌をはじめ、私が探した範囲では文字に残されたものは見つかりませんでした。

令和元年（2019）に編纂された『図説都筑の歴史』を見ると、堂ヶ坂の切り通しについて「地域には何



堂ヶ坂の切り通し

の記録も文書も残されておらず」とあり、近年になっても開削に関する記録は見つかっていないことがわかります。また、『生命の泉』によると、物語に登場する真照寺は天明4年（1784）に全焼し、堂宇や古文書も焼いてしまったということ、寺の記録もすでに失われていたものと思われる。

## 早苗地藏の建立年

『生命の泉』の内容についても吟味してみましよう。早苗地藏は真照寺開山から100年を経て、建立されたとあります。実際の早苗地藏は、舟形光背は本体に刻まれた銘から天和2年（1682）の建立とわかっていますが、立像の方は不明です。ただし、『生命の泉』の巻末年表には寛文2年（1662）に建てられたように書かれており、これを信じるならば、真照寺の開山は永禄6年（1563）なので計算は合いますが、了信とつがの慰霊としては建立までに時間が経ちすぎて不自然です。

## 切り通しの完成年

そもそも切り通しの完成年についても、どうして天文8年なのか、疑問がのこります。先に述べたように、記録は残っていないのです。

実は早苗地藏の伝説は、堂ヶ坂の切り通しの由来であるとともに、真照寺の開山と所縁があることを物語っ

ています。伝説では詳しく述べられていませんが、顕龍和尚が真照寺の開基となったのは、了信とつがとの関係が示唆されているように読みとれます。亡き弟子を弔うためか、つがに招かれたのか。その因果を成り立たせるためには、切り通しの完成は真照寺の開山以前でなければなりません。

切り通し完成年を開山の20年以上前に設定した理由は不明ですが、おそらく「来る夏も来る夏も早苗を供え、それは山のようになり、早苗塚とよばれた」というくだりのために、つがが真照寺に入寺するまで、ある程度の年月をおくべきと考えられたのではないのでしょうか。このようなことから、真照寺の開山から早苗地藏建立まで100年も隔たるという無理が生じたと思われる。

## 都田村誌

しかし、伝説に多少の矛盾があるのは大した問題ではありません。それ以前にもっとも着目すべきが『生命の泉』から7年後に発刊された『都田村誌』です。早苗地藏や真照寺がある折本町は、明治22年（1889）から昭和9年までは都田村に編入されており、『都田村誌』はその間の昭和4年（1929）に編まれました。

この村誌には、「名所」「旧跡」と「各部落伝説其他」という項目がありますが、そのいずれにも早苗地藏のことは書かれていません。それだけな

ら他の地誌などと同様、なんらかの理由で見落とされたかと思うところですが、『都田村誌』の編纂にたざざわった調査員一覧をみると、『生命の泉』を編纂した雲井麟静氏の名前があるのです。わずか7年前に『生命の泉』を世に出した雲井氏が調査員に加わっていないが、なぜ『都田村誌』では早苗地藏が取り上げられなかったのか。

## おわりに

考えられることは、ただ一つ。『都田村誌』編纂時には、早苗地藏は地域の伝説として認められていなかったのです。おそらく雲井氏自身も、それを伝説として村誌に収録することは考えてもいなかったのでしょうか。

『生命の泉』の序文には、「今秋奉村して早苗地藏の供養会を営むに当り、……この小冊子は供養会を記念すべく」とあります。また、本文の導入部では、大正の世を迎えて損得勘定で動く世相になったと嘆いています。

雲井氏は音楽や演劇に詳しく、劇団「都田・櫻月会」を設立して近くの神社で定期公演するなど、文化活動に力を入れていました。真照寺の近くに佇む二体のお地藏様の供養会設立を契機に、人々のために己をなげうつ僧侶の物語を世に出し、人心を正すとともに、地域の振興に役立たせようと考えたのではないのでしょうか。

（文：江口知秀）

早苗塚の上につづ早苗地藏（神奈川県横浜市都筑区）